

市民福祉常任委員会のテーブル1における参加者の主な意見等

番号	内容
1	・地域猫や保護猫を介した関係性の構築をしてはどうかと思う。猫を預ける、ラインやSNSを預けたときに交換する等の交流をして、何かあったとき連絡ができる関係を作っておくのがよいと思っている。 ・普段から、日常的につながっていることが重要である。 ・避難者もただじっとしていると、体調が悪くなる一方になってしまう可能性がある。助けられるだけでなく、できる役割を果たすよう動くことが本人の精神的な面からも必要である。珠洲は地域のつながりが強く、そういった点で積極的に動く人が多かったと聞いた。 ・また、動物愛護とともに、高齢者などについても、普段からつながりをもっておくのが重要であると思う。
2	・大規模地震の際、まず自分、家族。次に高齢者などのため、避難行動要支援者支援は後回しになると思うので、発災時の位置確認のため、IT機器が必要だと思う。物忘れタグやこども見守り用器具を活用して高齢者の災害時の位置特定に活用するのがよいのではないか。 ・家族だけでなく、町会長や民生委員にも位置情報を共有させるようなシステムを行政で、検討会を構成するなどしてほしい。
3	・町会に入らない人や地域のイベントなどに普段参加しない人は、災害時に情報が分からなくなる。普段から顔を見る、向こう三軒両隣のようなつながりが必要である。 ・公助、自助、共助はどれが欠けてもいけない。それぞれ補完し合う必要がある。 ・防災士の育成について、地域の中で仕組みづくりをすべきであると思う。 ・地域でリーダーや世話役になっている人に防災の活動へと加わってもらい、地域の人々がスキルアップしていくように取り組んでいけばよいと思う。
4	・学生の中には、防災活動などについて、やる気があっても、どう動いてよいかわからない、お金がない、声を出しにくいなどの事情から活動しにくいという人もいるので、学生とコミュニティのつながりがあることが望ましいと思う。 ・聴覚等の障害がある人や医療的ケア児など配慮が必要な人たちの家族から、周りへ迷惑をかけてしまう懸念や必要な物資がないなどの理由で避難ができないという声を聞いたことがあるため、マイノリティに配慮した避難体制の整備が必要ではないかと思う。
5	・令和6年能登半島地震の外国人被災者に話を聴くと、外国人が要支援者ではなく、ボランティア等に参加する支援側に回る、そういったネットワークを作る方にシフトすべきだと思う。 ・調べたところ能登は技能実習生が多いため、そういったところでは支援側に回るのがなかなか難しいが、金沢市は留学生や家族が多く、支援者となれる居住者が多いので、そういった人たちのコミュニティをつくり、要支援者である観光等で金沢市に来ている外国人を作れる体制を作るべきだと思う。

市民福祉常任委員会のテーブル 2 における参加者の主な意見等

番号	内容
1	・災害時に学生の手を借りたい気持ちも分かるが、学生の安全確保の徹底が第一である。 ・災害時の共助や地域における連携ももちろん大事だが、震災直後には、まずは自分の命を守ること、自分の安全確保を優先しなければならない。 ・親として、震災直後の共助を子どもに強要されることには危機感を覚える。子どもに対して大人の圧力で人助けを強要したり、誰かを助けなければならないという責を負わせてはいけない。
2	・自助、共助、公助とあるが、一番大事なことは自助である。 ・自分自身は3日程度の食料等の備蓄を行っているが、現在備蓄を行っていない人にどのように備蓄を促すためにアプローチしていくかが課題である。 ・町会単位などで防災訓練を行うことで、備蓄などの機運を醸成できるかと思う。 ・自分の住む地域は平地で古い家も多い。能登半島地震による一部損壊等で公費解体となった家屋もある。もっと大きな地震が発生したら、倒壊する家屋も出てきて火災が発生するかもしれない。古い家に住んでいる人は、倒壊してしまうからと諦めてしまい備蓄していない人もいるかと思う。
3	・能登半島地震発災後、トイレの問題が深刻だった。 ・自治体による簡易トイレの十分な備蓄が困難であるなら、食品等も含め、自身で備蓄を行うものへの補助金を検討してもよいのではないか。補助金があれば備蓄しようかと思うものも出てくるかもしれない。 ・金沢市のホームページに備蓄品の紹介等もあるが、市民全員がホームページを見るわけではない。補助金があることで市民に伝わりやすいのではないか。 ・上下水道の耐震化が重要である。上下水道が震災に強ければ、発災時にもトイレの問題は発生しないはずである。 ・地震の際には漏電による火災が発生している。その対策に効果的な感震ブレーカーの設置に対する補助金を検討してはどうか。

文教消防常任委員会のテーブル3における参加者の主な意見等

番号	内容
1	・戦争などの人災があった場合、避難所では対応できない。金沢は木造住宅が密集しているため、地下の堅牢な場所にシェルターが必要である。 ・小中学校の廃校跡地は住宅地にして、木造住宅が密集しているまちなかの住民を誘致する。2軒のうち1軒が移って集約していけば、区画整理のように道路を広くできるし、耐火住宅も作ることができる。また、高層の耐火住宅を県・市等の補助で建て、地下シェルターを作ればよい。そのような都市計画にすべきである。
2	・発災時の避難所などでは、耳が聞こえない人とのコミュニケーションには手話が必要である。手話対応できる人材の育成及び発災の場への配置に今以上に取り組むべきである。 ・金沢市聴力障害者福祉協会が手話奉仕員養成講座を行っているが、会場は松ヶ枝福祉館の1か所のみで、通いにくく受入れ人数も少ない。市内の北部や南部などそれぞれ通える場所に増やし、受講費用を補助して手話ができる人材を多く育成してはどうか。 ・手話ができる人も市に登録しておき、発災時には地区支部要員と同様に各避難所へ向かわせるようにしてはどうか。
3	・共助の主体は住民ではない。住民同士で進めるのは共助ではなく、自助である。皆被災者であり、発災したら動けない。 ・自分の校下には1万人が住んでいるが、災害が起こっても避難所に全員入れず、備品も避難所の機能も足りない。そうならないような都市計画を進めてほしい。 ・スフィア基準を参考にして体制を作るべきである。
4	・水害について、山林の間伐後の大きな木が放置され、川に流れて人為的に洪水が起きている。 ・間伐材の放置は禁止すること。また、富山では、川に流れてきた流木を販売しているが、金沢も販売するなど活用方法を考えてほしい。 ・森林環境税を活用して山林の立木の調査など行い、事前に災害を防ぐ対策をしてはどうか。危険箇所はドローン等を使うと調査できるので、危険箇所を除去する仕組みをつくってほしい。
5	・水害ハザードマップアプリ「にげまっし」がもっと知られるように防災教育すべきである。ただダウンロードしただけでは、せっかくよい機能があるのに上手く活用できない。出前講座などで使い方を教えたらい。 ・マイタイムラインの作成ワークショップを活性化し、いざという時にどんな行動がとれるか準備しておくよう防災教育するべきである。 ・能登から金沢にきた人たちの心のケアを充実してほしい。

文教消防常任委員会のテーブル4における参加者の主な意見等

番号	内容
1	・水害ハザードマップの1000年に一度の大雨という基準について、そんな大きな雨の被害想定をする必要があるのか。また、1000年に一度の大雨と言われてもどれくらいの雨なのかまったく想像できない。表現方法を変えるべきである。 ・ハザードマップの配布が遅すぎる。地域によっては10月に配布されたところもある。梅雨時期や秋雨の時期を過ぎてしまっているのでは意味がない。また、個別宅だけでなく事業所などにも配布するべきである。 ・議員の人たちは学校に備え付けてある防災備蓄品を見たことがあるのか。学校の先生も何があるのか把握していなかった。
2	・事前復興計画をあらかじめ作っておくべきである。 ・国でも「防災庁」を作ろうという動きがある。市では、危機管理課がその役割を担うことになるのかもしれないが、危機管理課に聞いても、道路ならここ、河川ならここと担当課に振られるだけである。金沢市でも「防災課」のようなものを作るべきである。 ・大桑水防倉庫は浸水想定区域にあり、水害時には使えないというのはおかしい。 ・ハザードマップを見ると、大体の老人ホームが浸水想定区域内にある。新築物件を建てる際にもそうだが、安全なところに住んでもらうよう市がもっと指導するべきである。
3	・小中学校で児童・生徒が学校にいるときに災害が発生した場合、保護者は迎えに行くことが難しいときがある。多くの小学校が避難所に指定されており、避難者用の備蓄品はあるが、通っている児童・生徒のための備蓄品はない。育友会や保護者会で準備しているところもあるが、それだけでは厳しいので、市でも準備してほしい。また、学校には備蓄スペースが少ないので、スペースの確保をお願いしたい。 ・子どもは学校で防災の授業もあり学ぶ機会はあるが、大人が防災について学ぶ機会は少ない。子どもに聞いてそうだったのかと思うこともあるので、子どもも大人も一緒になって学ぶ機会があればよい。
4	・PTAの中でも学校の避難体制について積極的なところとそうでないところがある。学校の協力体制が重要である。 ・1月1日という特別な日に地震が発生したことは、防災などについて石川県から全国に向けて発信すべきということだと感じている。学校の授業に「防災」という授業を加えてもよいと考える。子どもに対しても、自分の命は自分で守るという教育が必要である。 ・避難所によっては、水害発生時に1階が浸水する所もあるので、避難所の備蓄品は高いところに置いてほしい。
5	・小学校で備蓄品を見せてもらったことがあるが、数が少ないと感じた。実際の状況を想定していないのではないかと。避難所の備蓄品は今以上に充実させてほしい。 ・電気がないといういろいろなことができないので、避難所ごとに自前で電源が作れるような設備を設置してほしい。 ・学校では体育館が避難所になることが多いが、空調設備がないところが多い。小学校に避難したときに、空調のある音楽室にいたら、体育館に移動するよう言われた。体育館には空調がなく寒かった。災害対策の面からも空調設備を設置してほしい。